

大乘仏典の呼称をめぐる—sūtra の用例を中心に— (レジュメ)

米澤嘉康 (大正大学)

発表の概要：

本発表では、梵語大乘仏典において、「経典」の原語の 1 つであるとされる sūtra-の用例を収集して、その意味を再確認することを目的とする。

「経典」の梵語として想起される語といえ、sūtra-であろう。その語はバラモン教でも用いられており、典籍名で sūtra-を後分とする複合語は枚挙にいとまがない。その sūtra-は、「金言・格言(aphorism)」などと訳されている。仏教の典籍名で、その定義に合致するといえる用例としては、『波羅提木叉経(Prātimokṣasūtra-/ Prātimokkhasutta-)』や『律経(Vinayasūtra)』などを挙げるができる。それに対して、パーリ三蔵において数多く散見される、経題における複合語の後分としての sutta-という語は、「対話(dialogue, discourse)」と説明されている。三蔵の一構成要素であり、九分・十二分教の第一支でもある sūtra-/sutta-は、その仏教独自の用法と関連しているといえる。

パーリ三蔵における sutta-を複合語の後分とする経題の用例に基づいてであろうか、『法華経』や『維摩経』などが、Saddharmapuṇḍarīka-sūtra, Vimalakīrtinirdeśa-sūtra などと表記されることがある。「経」を sutra と逐語訳し、Lotus Sutra, Vimalakīrti-sutra などと、漢訳仏典の経題を欧文に翻訳することには首肯できるが、梵語の経題を、sūtra-を後分とする複合語で表記することに問題はないのであろうか？実際にそのような用例をどのくらい見出すことができるのであろうか？こうした疑問が、本発表の契機となっている。

本発表で対象となる梵語テキストは、インド文化圏に伝承されてきた仏典に限定する。用例の収集に際しては、Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages and related Indological materials from Central and Southeast Asia(GRETIL, <http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.htm>)所載の仏教関連テキストなどを使用する。

「経典」の写本奥書に記される経題において、「~ nāma mahāyānasūtra-」という型式は多数、確認することができる。しかし、mahāyāna-以外の語を複合語の前分とする用例は極めて稀である。それに対して、「論書」の引用において、sūtra-を複合語の後分とする経題の例をいくつか収集・確認することができる。しかし、その数も、決して多いとはいえないようである。よって、「経典」の梵語経題を表記する際に、sūtra-を後分とする複合語で表記するかどうか、細心の注意を払う必要があると思われる。

キーワード：sūtra, 経題, 用例